

唱歌を教材にする

「巧言令色少なしや仁」(論語)が頭にあれば巧言令色を恥じ、それをしない人になる。子供の頭に道徳的文章を叩き込むのが道徳の授業である。文章を覚えるには繰り返し暗誦が必要だが、リズムとメロディすなわち音楽にして歌えば容易に覚える。唱歌は道徳の一級の教材である

経宮管理講座 313 染谷和巳

資格はないが語らねばならぬ

「お前は道徳を指導できるのか。」と問は「文章力のある方」という条件に引かれたからである。面接の態度と発言は無礼で人を喰っていた(もちろん本人はその時気づかず、後になって面接した部長に言われたのだが)。面接した二人の部長は「不採用」にしたが、所長が作文のできればえを買って採用してくれた。

私は本は読んでいた。教育研究所だが所長は読書家ではなかった。ジャン・ジャック・ルソーの「エミール」の話をすると所長は「そんな本があるのか、持ってきてくれ」と言った。

所長の下で教材の原稿書きの仕事をし、所長に認められた。そのため、先輩や同僚の研究員は退職したり営業に配置換えになったり一人もいなくなり、入社三年で係長に抜擢、新人の部下五人を持つ管理者になった。

自分が礼儀知らずのくせに、人の上に立つと部下の無礼が許せなかった。新米係長を無視するような振舞いに神経を逆なでされて、部下を怒鳴りつけた。しかし二十歳歳の若い男女は私の「上司面」を陰で笑った。十歳の年の違いもあるが、私と距離を置き、仕事以外の接触を避けた。私にとって部下は不愉快な敵であった。

所長に対して自分も無礼な口のきき方や態度をしていると、ふと理由で捨てられた。

二十八歳の時、新聞の募集広告を見て、「社員教育研究所」の面接を受けた。自分が「教育する」仕事をしなかったのではない。文学青年を自認する私はむしろ人を型にはめる社員教育などに近寄りた

思った。私は部下にカリカリしているが、所長は私を叱らない。寛大な心の持ち主だと思った。所長は私をゴリラと言った。遊園地で私の子供を見た所長は「君の子はガキそのものだね」と嘲笑気味に言った。私は「所長の子はお嬢様、おぼっちゃまですからね」と皮肉を込めて言い返した。

六年目、三十四歳の時新設会社の取締役営業部長になった。文章書き半分、訪問営業半分の仕事になった。礼儀知らずでは通らなくなった。

それから四十年がたった。少しはましになったが、三つ子の魂百までである。相変わらず皮むけは変人野人である。だから道徳を教える資格はない。

資格はないが社員教育を仕事として以上触れざるを得ない。読者が納得し共感する、考え方を提供しなくてはならない。大酒飲みが「体に悪いから飲み過ぎるなよ」と論じているようなものだと思うてくれてよい。ということまで話を進める。

唱歌を学校が自ら捨てた文部省

教科書に新作はいらない。明治大正昭和の過去のもの再生すればいい。道徳はどの時代でもこの国でも通用する不変にして普遍のものである。「古典」の活用が最良であり、墓に埋もれている宝を掘り出せばいい。

昭和二十年の敗戦後、日本共産党が復活して経済界や教育界に大きな影響を及ぼした。昭和三十年代に日教組が学校を牛耳るようになり、民主主義に反する授業と教科書を廃棄処分にした。

たとえば学校の卒業式で必ず歌われた「仰げば尊し」は、歌詞の「身を立て名をあげ、やよはげめよ」が民主主義の時代に合わないとか、「やよ」などの文語は子供には難解でなじめないからという理由で捨てられた。

尊敬される言動をしなければならぬ。それが重荷になり、一労働者として気楽にやりたかったからかもしれない。まずは「仰げば尊し」の復活。卒業生と教師だけでなく、在校生全員が練習し覚えて歌えるようにしておく。

明治時代からの文部省唱歌には、軍歌ではないが国威発揚のため軍人もの、戦争ものの歌が少なくない。敗戦後そうした歌は削除され、あるいは歌詞を変えた。例えば、「冬の夜」の二番、過ぎいくさの手柄を語るを過ぎし昔の思い出語る、のように。そうした文部省唱歌の中に道徳の授業で使いたい「掘り出し物」がある。

一 おおげば 尊し
わが師の恩
教えの庭にも はや 幾年
思えば いと疾し この年月
今こそ 別れめ いざ さらば

故郷 作曲 高野辰之
作詞 岡野貞一

二 互いにむつみし
日ごろの恩
別るる後にも やよ 忘るな
身を立て 名をあげ やよ
はげめよ
今こそ 別れめ いざ さらば

一 兎追いし かの山
小鮒釣りし かの川
夢は今も巡りて
忘れ難き 故郷

三 朝夕 馴れにし
まなびの窓
螢のともし火 積む白雪
忘るる 間ぞなき ゆく年月
今こそ 別れめ いざ さらば

三志を果たして
いつの日にか 帰らん
山は青き 故郷
水は清き 故郷

戦さの手柄話の何がいけない

子供は父親を偉いと思いたい。偉いところを探す。最も身近な先人であり範とすべき対象だからである。子供は社会に貢献する父親、懸命に働く父親を知って背中を追いかける。自分も立派な大人になろうと思う。

これが父親に対する子供の基本姿勢である。家でくつろいでいる父親はたいした人でないようだが、外では戦っている、人から認められる仕事をしている。父親が口を開いたら子供はかしくまって話を聞くものだとこの歌は教える。

文科省は歌詞を元に戻して「冬の夜」を道徳唱歌に指定すべし。